

## [文化 1-1]

### 昭和 10 年代のバンコク日本人社会 ——星田晋五資料から伺えること——

北村武士

星田晋五 (1899～1978) は、日タイ文化研究所の主事として 1938 (昭和 13) 年から 1940 (昭和 15) 年までバンコクに滞在して、付属日本語学校を立ち上げて軌道に乗せ、帰国するまで学校を運営した。そして当時の多くのタイ関連資料を日本に持ち帰った。また、星田は帰国後も日本タイ協会や在日本タイ大使館などに勤務し、戦後の日本とタイの文化交流に関わる資料も収集していた。星田の死後、そしてその資料群は星田家に大切に保存されてきた。その詳細は参考文献 (星田・北村 2018) を参照。

2017 年にその星田資料群がリストとともに公開された。これらの資料の多くは、戦前のタイにおける日本語教育実施の詳細がわかる貴重なものであるが、日本語教育関連以外の資料も多く含まれている。今回は、日本語教育の分野を離れて、星田資料群に含まれている日本人会会員名簿に着目する。星田資料には、3 種類の 1940 (昭和 15) 年の日本人会名簿 (資料番号 16 番、17 番 18 番) があるが、いずれも内容が異なる。資料 16 番は、会員の会費納入情報が記載されており、資料 17 番は、会員の所属 (所属) と住所、電話番号が記載されており、資料 18 番には、会員の出身地が記載されている。これらの資料を繋ぎ合わせることによって、当時の日本人社会の様子 (人数、職業、出身地、など) を見ていきたい。

今回の発表は、星田資料群についてのタイ国内の関係者への紹介を兼ねて、本資料群のさまざまな分野からの調査分析の可能性を探るきっかけとしたい。

なお、星田資料群のスキャン画像および資料リストのコピー希望者は、当日 USB メモリを持参されたい。

#### 参考文献

星田昌彦・北村武士 (2017) 日タイ言語文化研究会発表会第 5 回東京大会発表資料

星田昌彦・北村武士 (2018) 「星田晋五関連資料の紹介」『日タイ言語文化研究』第 5 号

## [文化 1-2]

1937年の訪暹音楽・舞踊使節について  
—日本とタイの文化交流の一事例として

酒井 健太郎（昭和音楽大学）

タイと日本の間には古くから交流があった。国家レベルでは、19世紀末に通商と友好に関する条約が結ばれ、国交が開かれた。1924年に新通商条約、1941年には日泰攻守同盟条約が締結され、アジア・太平洋戦争において両国は名目上、同盟関係にあった。

両国間では文化面での交流も盛んにおこなわれた。1927年に東京で暹羅協会が結成され、これに呼応して1935年にバンコクで日本協会が設立された。バンコクの日本協会には日本の外務省が資金を出して日本語学校や文化研究所が併設された。さらに、両国は1942年に日泰文化協定を批准した。この協定にもとづき日本はバンコクに日泰文化会館を開設した。

この間、文化交流のイベント、コンサート、放送等が数多くおこなわれた。その一例として、1935年4～5月の「シャム国立音楽学校舞踊劇団」の来日を挙げることができる。これは、シラパコーンの教師・学生が「芸術使節」として来日し、音楽と舞踊を披露したもので、当時の新聞ではその動向が、多くの記事は写真入りで詳しく報道された。また、薬品の新聞広告にシャム舞踊の写真が載せられ、駐日公使のコメントが添えられることもあった。こうしたことから同舞踊劇団の来日・公演は一般にも広く受容されたと推測され、これまでに研究の対象にされてもいる。

この舞踊劇団の来日に対する答礼使節として、1937年1～3月に、尺八の吉田晴風をはじめとする三曲・尺八の吉田晴風ら、長唄の丹羽善之助（吉住小六郎）ら、舞踊の花柳徳兵衛らがシャムを訪れた。当時の新聞や雑誌等で比較的詳しく報じられたことから、社会的なインパクトは小さくなかったと推測される。しかし、管見の限りこれまでに研究の対象にされていない。

そこで本発表は、この吉田晴風を中心とする答礼使節の出発までの経緯や、現地での動向ならびに受け容れられ方などについて、主に日本側資料を用いて整理する。そのうえで、この答礼使節が果たした役割を考察し、日タイ両国間の文化交流史および日本の対外文化宣伝史における位置づけを検討する。

## [文化 1-3]

### E. P. ヒュースによる女性への登山奨励の余波 —タイへの影響も視野に

小橋玲治（大阪大学招聘研究員）

タイ初の女子教育専門機関であり、現在も名門の誉れの高いラーチニー女学校で初代校長を務めた安井てつ（1870～1945）は、タイ渡航以前に英国ケンブリッジ大学に留学し、そこで Cambridge Training Center 校長の E. P. ヒュースと親交を結んだ。1901 年から翌年にかけてヒュースは日本の教育視察のために来日し、安井も地方にまで随行した。先行研究では、ヒュースの来日による日本への影響として、スウェーデン体操の普及や、初等教育における絵画の効用についてなどが主に言及されてきたが、発表者が取り上げたいのは、ヒュースが奨励した女性の登山についてである。直接的には、1902 年 3 月 1 日に大日本婦人衛生会総会において「登山に就て」という講演を行ったにすぎないのだが、この講演は管見の限り 5 つのメディアで取り上げられている。一方、日本の女子教育に本格的に登山が導入されたのは長野高等女学校においてであり、同校が初めて戸隠山での集団登山を開催したのが同じ 1902 年であった。東京において一度行っただけの講演が、異なるメディアによって地方にまで拡散され、それを読んだ読者が影響を受け、実行したという可能性は考えられないだろうか。

安井がタイに渡ったのはその翌々年、1904 年のことであった。実際に安井がどのような教育をタイの女性たちに行ったのか、実はよく分かっていない。発表者はかつてラーチニーを訪問したこともあるが、同校にも資料はほとんど残されていなかった。安井は英国留学時、ヒュースに伴われてアルプスに登るほどであったが、かつて師から受けた教育を自身も異国の地でやった、すなわちタイ人女性に登山を奨励したという可能性は考えられないだろうか。

今回の発表では、ヒュースが一回だけ行った登山奨励の講演が、文字化されることによって日本人女性に対してどのような影響をもたらしたのか、そしてその一人でもある教え子の安井てつを通じてその余波がタイにまで及んでいたのではないかという可能性までを検討してみたい。

## [文化 1-4]

### 韓国映画における「負の記憶」と日本への受容

梁仁實（岩手大学）

本発表は「植民地の経験」をもつ韓国において〈戦後〉作られた映像作品において同時代の記憶がどのように表象されているのかについて考察し、その表象が現在どのように交錯し、受け継がれているのかについて考察するものである。また、こうした映像が「帝国の経験」をもつ日本に受容される際にどのように変容され、いかに置き換えられるのかについても考察する。ここでいう〈戦後〉とは「植民地」の経験を経て、その時代への「回顧」や「清算」が行われる間もなく、分断され、そのあと起きた朝鮮戦争により「反日」ではなく「反共」を第一国是とするようになった朝鮮戦争の後を指す。すなわち、韓国の〈戦後〉映画において「植民地」を振り返る、あるいはその時代の「負の記憶」を表象するということは、歴史でありながらまだ「死なない過去」での出来事を描き出すことである。

さらに、これらの映像は時には反韓/親日、反日/親韓のレッテルが貼られた形で日本に輸入され、消費されてきた。特に近年のこうした映画は日本輸入の際に、さらに多くの議論を呼び起こしている。韓国の「負の記憶」をめぐる映像は韓国国内の政治状況や社会・歴史・文化的制約から自由になることはできず、日本に受容される際にも日本国内の社会・文化的制約を色濃く受けているのである。そして、韓国においては1995年に制度上は「表現の制限」から自由になったものの、マーケットを意識すべき商業映画は少なからず日韓両国の反応を強く意識してきたのである。

本発表ではこれらの映像のなかでもここ20年余り（1995年から2018年）の間、作られた「負の記憶」をめぐる韓国映画がいかにして日本に受容され、消費されているのか焦点をあてる。帝国の経験をもつ日本は果たしてこれらの映像をいかに受容しているのか、その問いは日本社会において「戦後」というものがいかなる変容を遂げており、どのような形で変化しつつあるのかを問いかけようとするものでもある。このために、本発表では日本国内で発売された映画関連雑誌、批評、インターネットの映画評、予告編などを手掛かりにし、韓国映画の「負の記憶」の日本への受容過程とその変化を考察していきたい。

## [文化 1-5]

### 人形大使と近代日本

#### —ファッション特使から外交人形まで—

ベレジコワ・タチアナ（大阪大学大学院生）

日本において、近代は「人形使節」の時代であったと言えるほど、多くの人形が大使として外国へ贈られたのである。「人形使節」とは、人形を生きた人間の大使のように外国へ派遣する行為を指す。人形を外国へ贈ることによって、二国間の友好関係と相互理解、または国際親善や国際理解が期待されたのである。おそらく人形を贈るだけで国際親善を期待するなどという発想自体、理想主義者の夢物語でしかない、現代の人々は思うに違いない。ただ今から約 80～90 年前には、それほど大きな期待が人形に寄せられていたのである。

人形使節が最も多く贈られたのは、1930 年代であった。ただ、それ以前に行われた 1927 年の「日米親善人形交流」は当時大きな話題になり、両国の間で交換された人形は、「親善大使」と呼ばれ、悪化した日米関係を修復させる役割を担っていた。この交流は、先行研究において、人形使節の出発点とされている。ただ、それ以前にいわゆるファッション特使が西洋諸国の間で交換され、20 世紀になると日本においても注目され、好評されたのである。それで、人形使節の歴史がファッション特使から始まったと言えるだろう。

本発表は、ファッション特使の実態、日本における評価から始め、第二次世界大戦直前にイタリアとドイツへ贈られたいわゆる「外交人形」までの人形使節の歴史を追っていきたい。

具体的にいうと、発表を以下のような順番で行う。

「はじめに」において、時代背景と先行研究を簡単に説明する。特に、第一次世界大戦以降、なぜ人形使節が必要とさせるようになったのかを簡単に紹介する。そして、先行研究において、人形使節の歴史はどのように紹介されているのかを説明する。

次に、人形使節の歴史に注目したい。この歴史を三つの段階に大別する。まず、20 世紀以前、西洋諸国の間で交換されたファッション特使の特徴と日本における評価を紹介する。次に、1920 年代後半に当たる時期の人形使節、特に 1927 年の「日米親善人形交流」の特徴と影響を説明する。最後に、人形使節の展開期に当たる 1930 年代において、人形使節の発展、そして「外交人形」に注目したい。「おわりに」では、発表全体をまとめて、今後の課題について述べたい。

## [文化 1-6]

### NHK 朝の連続テレビ小説における「昭和 20 年 8 月 15 日」

増田幸子（立命館大学）

「8 月 15 日」と聞いて、多くの日本人は昭和 20 年（1945 年）の「終戦の日」を思い浮かべるだろう。ラジオから流れる玉音放送と正座しながら神妙に聞く人々、あるいは毎年行われる夏の甲子園での黙祷の風景など、戦争を体験していない人でさえも共有できる、これらのイメージはテレビや新聞などのメディアから得て作られた断片的な「8 月 15 日」である。日本には、このようなメディアが 8 月を中心に戦争と平和に関連した報道を行う「8 月ジャーナリズム」と呼ばれる状況が存在する。佐藤卓巳（2005）は、過去の新聞・写真・ラジオ番組編成などの検証をとおして、戦後日本人の間で、「8 月 15 日」が「終戦記念日」として、いかに記憶されていったかを 8 月ジャーナリズムの観点から明らかにした。

本発表では、このような問題意識をもとに、ジャーナリズムからほど遠いように見えるフィクションのテレビドラマをとりあげて、日本のテレビドラマが「8 月 15 日」をどう描き、「戦争」に対する記憶にどう関わっているのかを探っていく。日本のテレビ放送史上、「戦争」（ここではアジア太平洋戦争の呼称を使用）を数多く扱ってきたテレビドラマといえば、終戦記念ドラマと NHK の朝の連続テレビ小説（通称朝ドラ）であるが、本発表では、戦争の時代を生き抜いた庶民の物語を描くことが多い朝ドラを対象とした。「8 月 15 日」のシーンを映像と音声から分析することによって、国民的ドラマといわれる朝ドラが示してきた戦争に対する視座を明らかにすることが目的である。特に、復興期と言われる 2010 年以降の作品の中には、安定期（1976～1989 年）の王道路線の物語＝戦争の時代を挟んだ女性の一代記を描く作品が数多く制作されていることにも注目し、そこには 3.11（東日本大震災）が関連しているのではないかという仮定のもと、「8 月 15 日」のシーンに重なりつつある「戦争」と「震災」についても議論する。

## [文化 1-7]

タイ民話「12人姉妹」と現代メディアでの展開  
—日本民話における共通〈モチーフ〉とともに

平松秀樹（京都大学東南アジア地域研究研究所）

民話「12人姉妹」は東南アジア大陸部に共通して伝わる伝承であり、タイでは広く一般に知られている。元々はインドより数々の〈モチーフ〉として伝来していたと考えられるが、「パンニャーサ・ジャータカ」という東南アジアで作成されたジャータカ中の「ラッタセーナ・ジャータカ」（ロットセーン・チャードック）として所収され以来、仏教説話としても伝播していった。「12人姉妹」の話の後半部の主人公たる王子と夜叉の娘である王女との悲恋は、従来題材として多くの著名な歌手により歌われてきたほか、近年ではテレビドラマや映画や日本風のMVといった広範なメディアで再生産され続けている。

本発表では、「12人姉妹」の現代メディアでの展開を分析するとともに、民話「12人姉妹」中にみられる〈モチーフ〉のいくつかが日本民話における〈モチーフ〉とも共通している部分がある点を指摘したい。さらに発表の後半では、日本に映画留学し円谷英二のもとで特撮技術を学んだ、ソムポート・センドゥアンチャーイによる「12人姉妹」の映画化作品「プラロット メーリ」（1981年）を、現代メディア展開の一例としてとりあげる。作品にみられる日本の特撮の影響や、タイの民話に日本の特撮技術を融合させた本映画作品の独創性を考察してみたい。

## [文化 1-8]

### 漢語「洒落」の受容と展開

橋本凜（大阪大学大学院生）

日本語の語彙体系において漢語の占める割合は大きく、国語史上極めて重要な役割を果たしてきた(佐藤 1999, 鳴海 2015)。ゆえに、「愛」など個別の漢語に対する通時的なケーススタディも数多くなされている(松下, 1982 他)。ただ、従来の研究の多くは、言語学的観点を中心に漢語の受容とその意味・用法の展開を論じたものであり、その文化的側面を論じたものは岩井(2014, 2017)等少数に留まっている。しかし、漢語が日本人の文化や思想、生活と深い関係を有しているということもまた事実であり(金田一 1957 他)、漢語の受容と展開の歴史を正確に捉えるためには文化的視座からの考察も必要不可欠であると言える。

このような背景の下、申請者は禅や遊郭、俳諧等の複数の文化事象と密接な関係性を持つ「洒落」という漢語に着目した。「洒落」は各々の領域の中で重要な語・もしくは特有の語として位置付けられており、その意味や用法の展開過程において文化事象と何らかの関わりを有していたことがほぼ確実視される。本発表は、特に漢語「洒落」の受容の過程と禅学との関わりを中心に論ずるものである。

具体的には、これまでの文献調査において中国の総集『文選』(6世紀前半成立)に「洒落」の用例が見られることが明らかになっている。正倉院の古文書の記述を鑑みると、『文選』は、少なくとも奈良時代において日本へ伝播していた(佐竹, 1999)。ゆえに、「洒落」の語についても奈良時代には既に日本に流入していたと考えられる。少し時代は下るが、例えば818年成立の勅撰漢詩集『文華秀麗集』において「(木の葉が)落ちる」という意味での「洒落」の使用が確認できる。

一方で、禅学の世界においては「心に迷いやけがれがない」などという心の在り方についての表現に「洒落」という語が用いられていた。このような意味での使用は、日本における漢語「洒落」の展開にどのような影響を及ぼしたのか。そのような点を明らかにすることを本発表の目的と据え、『碧巖録』『仏光国師語録』等の文献に見られる用例を鑑みながら、日本禅林における「洒落」の定着過程について考察する。



[文化 1-9]

1910-40 年代における日本人男性の「支那服」物語

劉玲芳（大阪大学大学院生 / 日本学術振興会特別研究員（DC））

1910 年代以降、日本において「支那趣味」と呼ばれる流行が起こった。それにともなって中国研究も盛んになされた。その時期、多くの人々が中国のさまざまな風俗や文物などに関心を抱いた。その中には「支那服」に関する記述も少なくない。ただ、それだけでなく、実際に「支那服」を体験したり、「支那服」を長期間で着続けていたりした日本人も居た。ところが、異国の装いを纏うことは、女性にとってはファッションの色合いが強いとされるかもしれないが、男性の場合、どうやらファッションではないようである。しかし、これまでの研究には日本人女性の「支那服」について語られたものが見られるが、男性の「支那服」については看過されているのは事実である。

そこで、本発表は 1910-40 年代における日本人男性と「支那服」にまつわる物語を考察したものである。具体的には、どのような日本人男性が「支那服」を着用していたのか、彼らが一体どのような動機、どのようなきっかけをもって「支那服」を着ていたのかを明らかにした。それと同時に、彼らの「支那服」観を読み取ることが試みた。研究結果について、歌舞伎の俳優や「支那趣味」の知識人、また様々な職業の日本人が、日中演劇の交流、そして旅行あるいは留学をきっかけに、「支那服」を着用しはじめ、和服や洋服からは得られなかった新奇さを得て、楽しい体験ができたことが判明した。さらに、一部の「支那趣味」の知識人が一着の「支那服」を通じて、彼らが漢文化教養を持つ知識人であるという身分を標榜するとともに、積極的に中国文化に近づこうとしていた姿が見えてきた。ところが、日清戦争後、日本人の間で敗戦国の中国を軽蔑する風潮がまだ残っている当時、「支那服」の体験は、日本人自身が同胞から軽蔑されたり、暴行を受けたりする対象となることもあったのである。このような体験によって、「支那服」を体験した日本人は中国人のことを少し理解し、同情を示したのである。

## [文化 2-1]

「幽霊画」と視線：幽霊はなぜこちらを向くのか？

岩井茂樹（大阪大学）

江戸時代以降の日本では、幽霊が可視化された結果、「幽霊画」という日本画のジャンルが形成され、現在まで多くの作品が描かれてきた。とりわけ有名なものに円山応挙筆とされる「幽霊画」がある。従来の研究では、美術史的な研究に加え、「幽霊画」に足のない理由や「幽霊画」の用途などが議論されてきた。

発表者はこれまで「視線」という観点から、絵画を分析してきたが、その結果明らかになったことは、「美人画」や「幽霊画」、「役者絵」と呼ばれる絵に「視線」を画面の外に向ける絵が多く存在する、という事実であった。もう少し詳しく言えば、明治以降になるまでの間、神仏の絵を除けば、通常日本絵画に描かれる人物像は決して「視線」を画面の外には向けなかった。ところが、先に挙げた三つのカテゴリーに分類される絵には、「視線」を画面の外に向ける絵が相対的に多く存在するのである。円山応挙の「幽霊画」もその一例である。

本研究は、日本絵画において「視線」を画面の外に向ける、とりわけ鑑賞者と視線が合うような絵画を分析対象とし、「視線」を向ける意味を解明しようとするものであるが、本発表では、その内、「幽霊画」を対象を限定して分析と考察を行う。

「幽霊画」には画面の中に「視線」を向けるものが多いが、それらは大抵背景に状況描写がなされており、どのような状況で幽霊が出現したのかがわかるようになっている。つまり、幽霊に関する「物語」を鑑賞者が理解できるようになっているのである。それに対し、「視線」を画面の外に向ける「幽霊画」の背景は、何も描かれていないか、もしくは描かれていたと描写は最小限に抑えられている、という特徴がある。すなわち、幽霊が登場した時間や場所など、鑑賞者が得られる情報が極限までに制限されているのである。

発表では、このような事実から「視線」のあり方によって、大別して「幽霊画」に少なくとも二つの異なる用途があったのではないかという仮説を述べた後、そうした仮説が成立する場合に得られる新知見を明示する。

## [文化 2-2]

### 怪異伝承と水難防止教育との関わりについて

永原順子（大阪大学）

水難は人々の信仰心や宗教観に大きな影響を与えてきた。例えば日本では、カッパなどの怪異伝承や、溺死が神の意思であると語られる説話などにそのような影響を見ることができる。水難に関する研究に取り組んでいる水難学会では、水難防止教育ならびに uitemate（ういてまで）の普及を日本および島嶼部を多く持つアジアの国々で行ってきた。「ういてまで」とは、着衣状態で水難事故に遭遇したとき水面に大の字になって浮いた状態で救助を待つという自己救助法である。その普及活動において宗教観による広がり方の質の違いが見られていた。

そこで発表者は、共同研究者としてフィリピンおよびスリランカでの調査に同行し、水難事故と怪異伝承との関わりについて詳細な分析を試みた。普及活動において、実際に現地で救助法をコーチする指導員を対象に、日本の水の怪異伝承を紹介した後、その国での伝承について聞き取りを行った。

フィリピンでは、ショコイと呼ばれる人魚が海で泳ぐ者の足をひっぱり、深みに引きずり込むという、日本のカッパ伝承にも見られる伝承があった。さらに、自然を精霊化したエンカンタについては、怒らせると災害が起きる、人をさらう（神隠しのような事例）、などの伝承も聞かれた。スリランカでは、海などの波が荒いところの下にはディヤラクサという水の精霊がいて暴れているという伝承があった。

フィリピンのショコイが、カッパと同様、危険な場所から子供を遠ざけるために引き合いに出される一方で、スリランカのディヤラクサはあくまでも伝承であり、子供の事故予防には用いられていなかった。図像化に関しては、出版物や web 公開されているものなどを調査中であるが、日本ほど多くはなされていない。

それらの伝承は、外来宗教にも影響されつつ、多くは自然崇拜など、その風土で生まれた信仰心からの影響をより大きく受けており、そこに各国の人々の神や精霊との距離感の差を見ることができる。

## [文化 2-3]

### 眠れる町の儀礼—西条祭りの考察

タマシ・カルメン（兵庫県立大学）

およそ 300 年の歴史を持つ愛媛県の西条祭りは、そのモデルとなったかの有名な祇園祭ほどではないが、日本国内においては最大級の地車数を誇り、その保有数は現在において 87 台から 90 台にも及ぶ。本研究は、西条祭り開催時と開催時期ではない期間の両方を含めた現地調査の結果に基づくものであるが、特に後者の期間に注目することで、祭りを生み出した市そのものが祭りによって支えられているのではないかと考察するに至った。

国内の小規模都市と同様、西条市も出生率の低下、そしてより良い職と生活を得る機会を求めて大都市圏へ流れる若者の移住による人口減少の影響を受けている。しかしながら、西条市では都会へ移住した多くの若者が祭りの時期になると帰郷する傾向が見られる。若者の帰郷は正月や盆にも見られるが、西条祭りはそれらより重要視されており、地元民にとって一年で最も大切なイベントである。それは、色鮮やかで複雑な彫刻を施された地車の登場によってまるで別世界のような活気に包まれた祭り開催時の現地の様子から伺える。一旦祭りが終わると街はまた一気に活気が消え去り、手入れがされていない老朽化した家並みや、シャッター街となった人気のない商店街の静けさに包まれる。本論文では、西条祭りを社会的祭礼、つまりコミュニティによって形成され、支えられている行事だけでなく同時にそのコミュニティにとって生きる糧と都市計画の着想の源となる存在として考察することを目的とする。

## [文化 2-4]

西宮神社十日戎開門「神事」がいかにして生まれたか

—改暦・改暦よりの考察—

荒川裕紀（明石工業高等専門学校）

兵庫県西宮市にある、えびす宮総本社にて毎年開催される十日戎開門神事とは、1月10日の午前6時に西宮神社の表大門が開き、参詣客が約230メートルの参道を一気に走り抜けるものである。その中で一番早くに拝殿にたどり着いた参加者を「一番福」と呼称し、3着までを「福男」として昇殿させ、神社が彼らを認定するものである。

神事自体は30秒足らずのものではあるが、現在関西圏においては様々な媒体で取り上げられる神事となっており、現在では6000名が走り抜けるイベントとなっている。昨今では関西のみならず、日本国内はもとより海外にまで報道の配信が行われている。特にこの15年で急速に年中行事として関西圏で認知された祭礼といえる。

本発表では、史料、参加者へのインタビュー、更に発表者自身が8回「走り参り」に参加し、2005年からは祭礼の実施運営者として携わり、現在では開門神事講社の理事として当神事に携わるといった、20年以上の参与観察をもとに「十日戎開門神事」の歴史の変遷並びに現代的な変容を詳細に報告する。当神事の歴史的特徴としては、西宮神社の門開け行事が「忌籠祭り」を起源としながらも、西宮地域の産業都市化、時代の変化に伴って変容を遂げていったことである。

特に「改暦」・「産業都市化」・「太平洋戦争」・「高度経済成長」・「改元」・「阪神大震災」・「マスメディアの報道」がいかにかに当神事に対して変容を及ぼしたのかを紹介し、更に現在のように祭礼が巨大化し、年中行事として主に関西圏で受け入れられたのかについても、神事の再評価の側面、そして当神事の特長などから考察を行いたい。

## [文化 2-5]

### 言語文化的な観点から見た「水」

—『記紀』において—

シピトゥーニナ・マリーナ（大阪大学特任講師）

「生」、「死」、「火」、「水」、「地」など日常生活に使用されているの概念を表す語彙は言語ごとに意味範疇や価値観にはずれがあり、異なる言語的世界観を構成し、さらにそれと同時にそのずれが文化的世界観に生成されたものとも言えるだろう。さらに、同じ言語の中でも時代やコンテキストにより語彙の意味が異なる場合がある。本研究では「水」という語彙を取り上げて、上代日本語におけるその概念について考えたい。研究対象として日本最古書物である古事記（712）および日本書紀（720）をもとにして、文脈付キーワード KWIC を援用して「水」という語彙の用法を確定する。その上、古代日本文化に「水」という概念について論考する。

日本神話において「水」は基本的に以下の三つの意味で使われていることを確定しました。

まず、神は井戸から汲む飲む水である。第二に、イザナギの命が死者の国と考えられている黄泉の国への訪問後、禊払いを行う場面で穢れを落とす水である。さらに、直接に言及されていないが、天地開闢のエピソードで全物の始まりとして描かれている。日本書紀の本書では「昔、天と地がまだ分からず、陰陽の別もまだ生じなかったとき」であるが、日本書紀の「一書」として記録されたバリエーションは「何かが漂う」という表現を使い。陰陽五行では陰は女性および水に連想されている。古事記と日本書紀という編集には中国思想が影響を与えたが、一方、記紀に収録されたポリネシアン神話にも類似があ創造神話のもう一つ、矛から水が滴って島を生成させたという話でも始まりは水に連想されている。

神々が生まれるとき、女神が一人で親になる場合があっても男神が単独で神を生成させる場合もある。前者の場合は水が場面にあるかないかが強調されていないが、後者の場合「血」や「唾液」などの液体（水）が使用されている。

本発表では日本神話に見られる「水」の用法と意味を確定し、水と女性、水と生産力とのつながりを中心に「水」という概念の古代認知について話したいと考える。

## [文化 2-6]

### 近代仏教とメディア—日蓮主義の場合—

ブレニナ・ユリア（大阪大学特任講師）

明治維新以降の日本社会の近代化によって仏教にも劇的な変化が生じた。そのなかでとりわけ仏教と人々の関わりに影響を与えたのが、新しいメディア（媒体）の登場と普及である。仏教者や仏教団体によって発行された新聞や雑誌の数が明治期だけでも880に及び、大正・昭和期にも多数の新聞および雑誌が公刊された。また、これまで一般的だった説教に代わり、僧侶だけでなく、在家の仏教者や仏教系知識人による演説や講演が主流となった。さらに、数多くの仏教結社や仏教青年サークルが結成され、寺院に代わる社会空間が構成されたのである。

こうした仏教の教説や学知を伝える手段の多種多様化に対応し、明治時代後期から大正時代にかけて流行したのが日蓮主義である。全国各地で日蓮主義研究のサークルが結成され、知識人をはじめ多くの人々が日蓮主義の講演会に足を運び、日蓮研究に没頭する。その社会的な広まりの背景には、田中智学（1861-1939）と本多日生（1867-1931）による様々なメディアを駆使した布教活動がある。

本多日生は、僧侶の立場で全国各地の寺院、公共施設、学校、工場などで講演を行い、様々な社会層に日蓮主義を説き、また、多くの研究団体や教化団体を立ち上げ、機関誌を発行し、日蓮を信奉する知識人たちのネットワークを作り上げる。日蓮主義の命名者である田中智学も、より広く日蓮の教義を社会に普及させるべく、在家仏教運動を開始した当初から、公開演説会や講演会といういわば「オーラル・メディア」に加え、雑誌や新聞などの活字メディアを活用した。こうした機関誌を介して、地方会員のネットワーク化が図られ、対面的な演説会や講演会と違った形で新会員を確保する仕組みを確立していく。そればかりか、幻灯、ラジオ、レコード、実写映画といったそれぞれの時代の先端的メディアを取り入れ、さらには、歌舞伎、演劇、歌謡曲、舞踊といった芸術も宣教手段として活用し、日蓮主義の流行をもたらしたのである。

そこで、本発表では、田中智学と本多日生の日蓮主義を中心に、近代日本においてメディアが仏教のあり方をどのように変えたのか、そして、仏教と人々の関わりにおいてメディアが果たした役割について考察していきたい。

## [文化 2-7]

### テレビ番組の翻訳による出演者イメージの生成と変質

一日韓・韓日翻訳の意識・誤訳の事例をもとに—

鄭惠先（北海道大学）

翻訳を介したテキストを考察するには、二つの観点が必要となる。「テキストのジャンル特性」と「言語間の翻訳ストラテジー」である。本発表では、日韓のテレビ番組の中でも、娯楽性を重視するバラエティ番組のジャンル特性に注目し、番組制作者が翻訳過程に積極的に関与して行われるディスコース操作の様相を考察する。具体的には、実際の翻訳字幕を事例に、制作者の意図的または非意図的な意識・誤訳によって、番組の中で体験談を通して表出される出演者のイメージが生成され、新たなキャラクターが作り出された結果、視聴者に事実とは異なる変質したイメージを与えることを検証する。

石原（2010）では、翻訳者が「対応の優先順位の判断」を行う際にテキストジャンルが重要な役割を果たすと述べられており、河原（2014）では、新たな翻訳研究手法の枠組みとして「翻訳分野・ジャンルの多様化に伴って、『翻訳等価』のあり方を複眼的・複層的に見ようとする『多元等価論』」が紹介されている。一方で、塩田（2005）は翻訳とバラエティ番組の文字テロップの共通点として、両者ともに媒介者（翻訳者、制作者）を介してなされる二次的伝達状況下でのコミュニケーションであることを指摘している。

以上から考えると、翻訳字幕は翻訳者の翻訳ストラテジーと制作者の制作意図が交差した「二重の二次的伝達状況」を有することになり、通常の翻訳や翻訳を介しない文字テロップのみの伝達状況に比べると、必然的に複眼的で複層的なディスコース操作が行われやすい環境にある。しかも、エンターテインメント性の高いバラエティ番組の翻訳字幕は、ほかのジャンルのテレビ番組に比べて形式的等価（Formal Equivalence）より動的等価（Dynamic Equivalence）への志向が強く、それが屈折した出演者イメージを生成し定着させる重要な要因として働いている。

以上の実態を検証することで、テレビ番組の翻訳過程における「ジャンル特性」と「翻訳ストラテジー」の中核に「制作者の制作意図」を位置づけ、三者間の有機的な関係を明確に示すことができると考える。

石原知英（2010）「テキストジャンルによる翻訳プロセスの違い-内観報告の計量的比較分析」『通訳翻訳研究』10、pp.85-101

河原清志（2014）「翻訳等価論の潮流と構築論からの批評」『翻訳研究への招待』11、pp.9-33

塩田英子（2005）「バラエティ番組における文字テロップの役割」『メディアとことば』2、ひつじ書房、pp.63-91